



特集

建築のまちを旅する 12

## 石見

赤瓦にまちづくりの夢を託す  
江津の甍街道をゆく



## 表紙の写真

島根県芸術文化センター  
「グラントワ」外壁  
設計 | 内藤建築設計事務所

石州瓦のふるさと、石見の最も西側に位置する益田市に立つ複合文化施設。赤瓦を屋根だけではなく壁にも利用し、計28万枚の瓦で覆っている。瓦は製造時に釉薬を調整し、6種類に色分けしたものを使用。時間帯によっては赤茶色の瓦が青く輝くこともある。設計者は伝統的な地場産業である石州瓦に着目し、その強さ、品質の良さ、ガラス質の釉薬を施した瓦が光の角度で微妙に色合いを変える面白さに惹かれ、壁にも使おうと考えた。「瓦といえば屋根」の既成概念を大きく覆し、瓦の新たな使い方を示すとともに、地元の人が永く目にしてきた瓦の新しい表情を引き出した [写真:石田 篤]

## 左写真

〈藤田家住宅〉屋根  
設計 | 不詳

1853(嘉永6)年の建築。登録有形文化財。藤田家は江戸時代に銚鉄を扱う回漕業を営み、その記録が「五島屋文書」として残っている。小さな屋根は竈突(くど)の煙出で、妻側が正面を向いている。余所の地では見ない、江津本町独特のつくりだ [写真:石田 篤]

LIXIL eye no.24  
2021年2月20日発行

発行 | 株式会社LIXIL  
編集発行人 | 早川氏幸  
開発営業本部  
TH統括部  
〒136-8535  
東京都江東区大島2-1-1  
Tel: 03-6837-1646  
Fax: 03-6837-1662  
制作 | 株式会社フリックススタジオ  
デザイン | 株式会社ラボラトリーズ  
印刷 | 竹田印刷株式会社

\* 本記事の無断転載を禁じます  
\* 本文中の敬称は省略させていただきました

次号『LIXIL eye』no.25は、  
2021年7月発行予定です。

『LIXIL eye』のバックナンバーは  
インターネットでご覧いただけます。  
<http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/>

## 訂正とお詫び

本誌no.23、「新世代・事務所訪問」40ページの写真3中央に、水平に線が入る不備がありました。ここにお詫びいたします。

## CONTENTS

### 特集

04 建築のまちを旅する | 12

## 石見

06 テーマ1

赤瓦にまちづくりの夢を託す  
江津の薨街道をゆく

ナビゲーター | 梅田賀千・山本雅夫

10 島根県芸術文化センター「グラントワ」／江津市庁舎／パレットごうつ

14 テーマ2

左官職人のふるさとで花開いた  
建物の壁を彩る鏝絵のアート

16 石見建築めぐり

22 住宅クロスレビュー | 12

住み継ぐ

村山 徹 + 加藤亜矢子「天井の楕円」× 八木佐千子「早宮の家」

32 建築家の〈遺作〉 | 09

林 雅子「都城の家」

談 | 白井克典

36 新世代・事務所訪問 | 12

DDAA/DDAA LAB

ナビゲーター | 門脇耕三

44 構造家の新発想 | 12

磁力建築

江尻憲泰

48 触覚デザイン | 09

坂倉準三のドアハンドル

ナビゲーター | 笠原一人

52 土木のランドスケープ | 12

草津川跡地公園・区間5「de愛ひろば」

ナビゲーター・文 | 八馬 智

58 TOPICS

パブリックイノベーションを自動設計するクラウドサービス「A-SPEC」を公開  
文 | 小松紀明

60 INFORMATION

LIXILビジネス情報サイトのご案内／LIXILからのご案内／展示のご案内／LIXIL出版 書籍案内

64 紙上の建築 | 12

Model For A Certain Event

とある出来事的设计

砂山太一

# 石見

大田から益田にかけての島根県西部が石見地方。かつての日本最大の銀山「石見銀山」は世界遺産で知られ、鉱山跡や街道が残っている。銀山より西の港町では、この地の特産である石州赤瓦の風景を目にする。古民家から現代住宅まで使われている赤い瓦の連なりは独特だ。この赤瓦は現代公共建築にも継がれている。島根県芸術文化センター「グラントワ」は、垂直の壁面にも瓦を使う建築家・内藤廣の意欲作だ。瓦を施工するのが屋根左官なら、壁をつくるのが壁左官。この地では歴史的に腕のいい大工と左官が生まれており、鏝絵の傑作も広く点在する。歴史的な中心都市は、中国地方最大河川・江の川河口に栄えた「江津」。旧市街の街道が残り、吉阪隆正の代表作・江津市庁舎のあるまちだ。ここを含め、海岸沿いの建築旅をはじめよう。

日本海に沿って走るJR山陰本線の波子(はし)駅近くの展望台から望む、江津市波子町の赤瓦のまち並み。青い日本海とのコントラストが鮮やかだ。車窓からこの赤瓦の景色が目に入ると、県外に出た江津の人は「帰ってきた」と強く思い、初めて江津を訪れた人は「元気が出る」と話すという。江津は東京から鉄道で移動した場合の時間距離が全国で最も長く、「東京から一番遠いまち」として高校の地理の教科書で取り上げられたことがある[写真:石田 篤]

## テーマ1

# 赤瓦にまちづくりの夢を託す 江津の葺街道をゆく

ナビゲーター | 梅田賀千(鳥根県建築士会江津支部理事)・山本雅夫(江津市建設政策課長)

取材・文 | 長井美暁  
写真 | 石田 篤(特記以外)

## 02 | 大森代官所領

鳥根県大田市にある石見銀山は大森銀山とも呼ばれ、天領だったことから代官所が置かれていた

## 03 | 夢街道ルネサンス

歴史や文化をいまに伝える中国地方の街道を「夢街道ルネサンス認定地区」として認定する事業。中国地方の豊かな歴史・文化・自然を活かし、地域が主体となって個性ある地域づくりや連携・交流を進め、地域の活性化を図るとともに、楽しみながら巡る「新しい街道文化」の創出を目指している。鳥根県からは10地区、5県合わせて49地区が認定されている

## 葺街道のまち並み

本町の端の高台にある「二楽閣(じらかく)」の跡地から葺街道のまち並みを見る。赤瓦の屋根とひと口に言っても、色むらのあるものもないものや、黒っぽい瓦もあることがわかる。山本氏は「この屋根景観は、江戸時代からまったく変わらない大変貴重なものだと思う。世界遺産の石見銀山のまち並みにもありません」と話す。写真中央を走る道路は旧山陰道で、この先の峠に浜田藩との敷地境界である石造の標柱が立つ。二楽閣は豪商・飯田家の別邸で、江の川が悠然と日本海に向かって流れる景色も見渡せる



## 06 | 建築のまちを旅する | 石見

鳥根県石見<sup>いわみ</sup>地方で古くからつくられてきた石州瓦は、愛知県の三州瓦、兵庫県の淡路瓦と並び称される。石見地方は日本三大瓦産地の一角をなし、いまも江津<sup>えつ</sup>を中心に生産されている。石州瓦は赤瓦を代名詞とするように、独特の赤茶色が特徴で、赤瓦の屋根が続く家並みは壮観だ。

江津ではこの赤瓦をまちのアイデンティティとし、まちづくりを行っている。約20年前からそれに尽力する鳥根県建築士会江津支部理事の梅田賀千氏と江津市建設政策課長の山本雅夫氏の案内のもと、市内を巡った。

東西に細長い鳥根県<sup>01</sup>で、江津市は中央部よりやや西寄りに位置する。中国地方最大の河川「江の川」が市の中心を流れ、日本海に注ぐ河口部に市街地が広がる。

江津とは「江の川の港」の意味で、その名の通り、南北朝時代から江の川の舟運の要衝として、中世に入ると日本海の海運との結節点として栄えた。上方航路が開かれた江戸中期以降は北前船の寄港地や天領米の積出港としてにぎわい、岸辺には40から50隻の帆船が並び、入港を待ち合わせる船もあるほどの混雑ぶりだったという。かつての中心地だった本町<sup>ほんまち</sup>地区は、江の川の河口から約2km上流にある。江戸時代には川岸から町中に向けて多くの廻船問屋の蔵屋敷が軒を連ね、その中心を街道が貫き、陸路との交通の接点でもあった。もともとは浜田藩領だった江津本町が幕府直轄地の大森代官所領<sup>02</sup>に組み込まれたのは、水陸双方の交通の要だったからだ。

本町地区は明治期以降も地域行政・経済の中心地だった。しかし、1920(大正9)年に国鉄が開通するとその繁栄も陰りはじめた。1954(昭和29)年、江津町は都野津町などと合併して江津市が発足。建築家の吉阪隆正の設計による市庁舎が1962(昭和

37)年に完成すると、本町は中心地としての役割を終えた。以降は人口の空洞化が進み、古民家や空き家などが解体され、地域の活力が衰退するとともに、地域の歴史や文化までもが忘れ去られるような状況になっていた。

## 転換点は約20年前

1926(大正15)年に建てられた「旧江津町役場」は、現在はまちづくりの拠点施設「江津本町葺街道交流館」として使われている(詳細19ページ)。ここを起点に、梅田賀千氏と山本雅夫氏と一緒に「葺街道」を歩きはじめると、すぐにその景観に引き込まれた。江戸期から昭和初期にかけて建てられた赤瓦の商家や土蔵が往時の面影をとどめながら点在している。

「葺街道」という道が実際に存在するわけではない。これは本町地区のまちづくり活動を表す名称だ。「葺」は屋根瓦、または瓦葺きの屋根の意味で、江津の人々が本町地区を盛り上げようと取組みを始める際に、夢と瓦を合体させたようなこの文字を使い、2004(平成16)年度に国土交通省などが支援する「夢街道ルネサンス」<sup>03</sup>に「天領江津本町葺街道」として認定された。江戸時代から赤瓦の輝くまちだったという歴史と天領としての重要性、また、現在も石州瓦の主たる生産地である江津市の将来への夢が、この文字に託されている。

本町地区で赤瓦の景観を後世に残そうという取組みが始まった大きな転換点となったのは、1999(平成11)年に鳥根県建築士会江津支部が開催した

## 01 | 鳥根県の各まち

鳥根では松江や出雲など東部がよく知られるが、西部も天領・石見銀山を中心に栄え、江津はそれに次ぐ繁栄ぶりだったという。江津周辺の波子(はし)、都野津、黒松も赤瓦景観がよく残る。また、石州瓦は浜田や益田でもつくられている。温泉津(ゆのつ)は銀の積出港として栄え、港から山側は温泉街が形成され、そのまち並みは伝統的建造物群保存地区に選ばれている。「石見銀山遺跡とその文化的景観」の一部として世界遺産にも登録されている



「街並みウォッチング」だ。梅田氏と山本氏はこのときに本町地区の歴史をあらためて知り、「この赤瓦の景観は残さなければならない」と強く思った。「それまではここに何があるかという目で見えていなかった。取り残された古いまちとしか思っていませんでした」と山本氏。梅田氏も「赤瓦に愛着はあったものの、詳しい歴史は知りませんでした」と振り返る。

この少しあと、梅田氏は母校・神奈川大学の同窓会に出かけ、恩師である故・西和夫教授<sup>04</sup>に本町地区の赤瓦景観の魅力を話した。すると西教授は研究室の学生を連れてこの地を訪れ、7回におよぶまち並み調査を数年かけて行った。

「西先生のおかげで、本町の学術的な調査が進みました。また、西先生は寺などに住民を集めて調査結果を報告し、それによって住民も、自分たちのまちにはそんなに良い建物があるのかと気づかされ、まちづくりが発展したのです」

2003(平成15)年には、住民による「本町地区歴史的建造物を活かしたまちづくり推進協議会」が立ち上がった。市が同年、都市計画による住宅マスタープランを策定するのに合わせ、地域の歴史文化や歴史的建造物を活かしたまちづくりの可能性を提言したところ、「一気に気運が高まりました」と山本氏。それまで誰も気づかなかった赤瓦の価値を地域の資源として活かすまちづくりができないか、議論されるようになった。

## 水がめをつくる技術から 石州瓦は生まれた

赤瓦を代名詞とする石州瓦は、石見地方各地に存在する、「都野津層」と呼ばれる粘土を利用してつくられている。

石見地方での瓦づくりは、江戸時代の初期、全国各地で展開された城下町建設の流れのなか、鳥根県西部の浜田藩の城の天守閣に葺かれたこと

から本格的に始まった。1619(元和5)年に大坂から招かれた瓦師が瓦の製造から施工まで一貫して指導にあたり、浜田城の屋根を瓦で葺き上げたという。ただし、そのときにつくられた瓦はおそらくいぶし瓦で、赤瓦ではなかったと考えられている。

赤瓦は釉薬を施して焼くことで生まれた。これは石見焼きの影響だ。石見焼きは江戸時代の中頃に始まった。水がめや壺などの“丸物”が特徴で、特に「飯胴<sup>はんどう</sup>」<sup>05</sup>と呼ばれる大型の水がめは寒さに強く、凍てに弾けないとして、日本海沿岸を北上、江戸から昭和の永きにわたり大ヒット商品だった。いまも江津の家々では庭や畑などにこれを置いているところが多く見られる。

凍てに強く、水を通さず、割れにくい丸物をつくれたのは、先述の都野津粘土のおかげだ。この粘土に恵まれた環境から、作陶していた職人たちは瓦づくりに挑戦するようになる。

石見焼きには「来待釉<sup>きまぢゆう</sup>」という釉薬が使われる。山本氏は「来待釉が本格的に使われるようになったのは江戸末期の“はんど”からだと思います。来待釉を使った年紀のある現存最古の瓦が1797(寛政9)年と確認されています。江戸幕府は庶民のぜいたくを禁じていたので、他の地域で庶民が釉薬瓦を利用するようになったのは明治以降ですが、本町は天領であり財力もあったためか、早くから釉薬瓦が使われていたようです」と話す。

来待釉は鳥根県東部の出雲地方で採掘される来待石から採れる。来待石は約1400万年前に形成された凝灰質砂岩で、耐火度が極めて高く、同じく耐火度の高い都野津粘土とともに使うと焼き物の品質が高まった。また、来待石に含まれる鉄などが高温で焼成されることで赤茶色に出来上がった。

職人たちは大型の丸物を焼くのに使っていた巨大な登り窯<sup>06</sup>を活用し、1300℃もの高温で瓦を焼いた。石見地方でいまも多く見られる登り窯跡は、房が10段から18段もある。高温焼成に適した松の

## 04 | 西和夫

建築史家(1938-2015)。神奈川大学名誉教授。全国各地の歴史を活かしたまちづくりにかかわり、文化庁の審議委員なども務めた



葺街道にて、山本雅夫氏(左)と梅田賀千氏。同い年のふたりは地元建築士会主催の「街並みウォッチング」以来20年、それぞれの立場で本町地区の赤瓦景観の保存に尽力している【写真：編集室】



## 05 | 飯胴

「はんど」または「はんど」と呼ばれる水がめ。赤茶色の来待釉に黒色の「たれ」という模様をつけているのが特徴。本町地区では現在、標識として各所で利用されている【写真：編集室】



## 06 | 登り窯

土床坂(つっこざか)周辺には戦前まで9軒の窯元があり、豊田窯、森脇窯、竹下窯、有田窯の登り窯跡が残っている。主に丸物と呼ばれた粗陶器をつくっていた【写真：長井美暁】



08 | 藤田家住宅(五島屋)

主屋は江戸末期の1853(嘉永6)年の建物。屋根の上の煙出しが特徴的だ。藤田家は江戸時代に鉄銚を扱う回漕業を営み、その記録が「五島屋文書」などとして数多く伝わっている。本町地区を代表する近世住宅として貴重な存在で、国の登録有形文化財となっている。関連20ページ



09 | 横田家住宅(沖田屋)

横田家は江戸初期に本町地区へ移ってきた。回漕業を営み、莫大な財をなし、飢饉対策や開墾に私財を投じたと言われる。主屋や門などの屋根の椽には、近隣にはないほど熨斗(のし)瓦が高く積まれ、反りを強調している。関連20ページ



10 | 旧花田医院

カーキ色の屋根瓦が本町地区でひときわ目を引く。1937(昭和12)年に建てられた。そのころの瓦の色は赤が主流だったが、1934(昭和9)年にカーキ色が陸軍の軍服色(国防色)として定められ、石州瓦もその影響を受けたものと思われる。国の登録有形文化財。関連20ページ



16 | 江津市新庁舎(左)とシビックセンターゾーン(右)

シビックセンターゾーンに建設中の新市庁舎は、2021(令和3)年に完成予定(2020年12月1日撮影)。右の写真は現・市庁舎の屋上からシビックセンターゾーンを見た様子。中央右手の矩形の建物は、建築家の高松伸の設計により、1995(平成7)年に竣工した「江津市総合市民センター(ミルキーウェイホール)」。関連19ページ



### 07 | トンネル窯

陶磁器や耐火物などの連続焼成用に、長いトンネル状に築いた窯。内部は予熱帯、焼成帯、冷却帯の三部からなり、焼成品を積んだ台車がレールの上を順次動くことで焼成する



11 | 軒瓦

屋根瓦の軒先で雨水を切れやすくするもの【写真：長井美暁】

### 12 | ケラバ

切妻屋根や片流れ屋根で、妻面の、雨樋が付いていない部分を指す



13 | 鬼師

鬼瓦をつくる職人のことで、熟練の技術が求められる。なお、鬼瓦は鬼面に限らず、たとえば上の写真の「打ち出の小槌」など、さまざまな願いを込めた意匠がある【写真：梅田賀千】



14 | 江津市庁舎

建築家の吉阪隆正の設計により、1962(昭和37)年に竣工。詳細12ページ

木が周辺の山林に豊富だったことも背景に挙げられる。現在の石州瓦はトンネル窯<sup>07</sup>で、焼成温度は1200℃以上だが、それでも日本各地の瓦のなかでは最も高い。高温で焼くからこそ、強度や耐寒性に優れた瓦になる。

石州瓦は江戸後期から明治にかけて、北前船によって日本海沿岸の各地に運ばれ、遠くは北海道まで広く使われた。最盛期にはこのあたりの仲買人の持ち船は100隻を超えたといわれる。また、瓦焼き職人が余所の地に出向き、そこで瓦に適した粘土を見つけて焼く「出職」もあった。たとえば岡山県高梁市の「備中吹屋」のまち並みに見られる屋根瓦は、石見の職人が出向いて焼いたものだという。

こうして石州瓦は石見地方のアイデンティティとも言えるものになった。しかし昭和50年代から、市内の住宅では屋根に黒瓦を採り入れることが増え、赤瓦と黒瓦の逆転現象が発生した。昭和60年代には黒瓦屋根の住宅地もできていた。山本氏は「高度経済成長期以降の市内での住宅建設ブームにおいて、他との差別化など個々の上昇志向が強く芽生えたことや、同時期に寺院の屋根の葺き替えが進み、地域のシンボリックな存在である寺院の大屋根が赤瓦から黒瓦に変わったのも影響していると思われる。市の施策としても、景観形成の概念はなく、地場品である石州瓦を使えば、赤でも黒でも青でも何色でもいいという流れがありました」と語る。石州瓦は釉薬を使うから何色でもつくれる。市場に需要があれば生産者がそれに応えるのも世の常だ。

## 瓦屋と左官が生み出した景観

覺街道に戻ろう。「江津本町覺街道交流館」から少し歩いたところに、「藤田家住宅<sup>08</sup>」や「横田家住宅<sup>09</sup>」など当時の繁栄ぶりがうかがえる商家が並ぶ。棟の高さと両端の反りは、その家の財力を表

す。また、1937(昭和12)年に建てられた「旧花田医院<sup>10</sup>」の瓦はカーキ色で、独特の趣きがある。そこから続く家並みは軒が低い。これらのはかつて醬油屋、薬局、呉服屋などの店舗だった。道に面する間口が狭く、奥に長い家屋は町家建築の特徴だ。

まちの規模に対して神社仏閣も多い。「宗派の違う寺があるということも、かつてのまちの財力を示すものでしょう」と山本氏。まちの発展は北前船の運航とともにあったことから、神社には船の無事を祈る石造物や絵馬なども見られる。これらもまちの歴史を伝えている。

家々の瓦を見ていると、あることに気づく。ひと口に赤瓦と言っても、すべて同じ赤茶色ではないのだ。色むらがある。「色むらのある瓦は登り窯で焼かれた手づくりで、来待釉を使っています。登り窯で焼くと窯ごとに、また焼くたびに、色が違いました。窯の内部の入り口と奥でも温度差があり、それも色むらの要因でした」と梅田氏。

そこで瓦は選別して等級を分け、上級品を余所の地域に出荷した。江津でも庄屋など格式のある家は上級品を使った。納屋などの建物には下級品も使われたので、黒っぽいものも交じっている。梅田氏は「下級品で葺くのは瓦の産地だからこその特徴です」と話す。

時代が下がってトンネル窯で焼かれたものは、機械による量産品で、化学釉を使っているため赤茶色が均一だ。登り窯で焼かれた「本(古)来特色」の瓦に対し、トンネル窯で焼かれた瓦は「新来特色」と呼ばれ、色むらのある風合いを出すために、あえて「混ぜ葺き」にすることもあるという。

続けて梅田氏は軒瓦<sup>11</sup>の説明してくれた。これを見ると、その瓦がどの時代につくられたかがわかるというのだ。1903(明治36)年、石見焼陶器製造業組合が設立されるより前につくられた軒瓦には植物の文様が刻まれている。1903年から1935(昭

和10)年までの軒瓦は中央にさまざまな窯印が入り、1935年以降は石州瓦工業組合の設立により統一文様になった。梅田氏はこう分析する。

また、石見地方で特徴的なのは、左官職人が屋根瓦を葺いていることだ。石見には腕の立つ左官が多く、石州左官と呼ばれ、饅絵が有名だ(詳細14-15ページ)。そんな左官たちの高度な饅さばきは妻壁やケラバ<sup>12</sup>からもうかがえる。

梅田氏は鬼瓦も見るようにと促す。火災などの災害に遭わないように、また、家や商売が栄えるように、あるいは、縁起が良いものとして、寺院などでは魔除けとして、といったさまざまな願いが込められた鬼瓦にも、時代ごとの意匠の違いがある。「江津の赤瓦の風景は、瓦屋と左官と鬼師<sup>13</sup>が生み出したもの。200年以上も赤瓦をつくりつづけ、かつ、使いつづけてきたというのは誇れるところだと思うのです」。

梅田氏はまちづくりにかかわるなかで瓦そのものにも興味をもち、独自に調査研究を進めている。「軒瓦にしても鬼瓦にしても、解明できていないことは多い」と話す。また、まち並みというマクロの視点と、瓦へのミクロな視点、その両方が覺街道に深みを与えている。まちづくり推進協議会が発行するパンフレットには、梅田氏のこれまでの調査研究の成果が盛り込まれている。

## まちの歴史をたどることができる

石州瓦には名立たる建築家を魅了するものがある。このことは、吉阪が設計した「江津市庁舎<sup>14</sup>」や、江津ではなく益田市だが、建築家の内藤廣が設計した「島根県芸術文化センター『グラントワ』<sup>15</sup>」が示している。

とはいえ、瓦の需要が激減していることも事実だ。山本氏は「近年は住宅ニーズの多様化が進み、洋風を中心にさまざまな意匠の住宅が求めら

れています。また、家は“建てる”ものだったが、車のようにカタログから選んで“買う”ものへと意識が変わり、個々の好み最優先されるようになりました。これが住宅地や集落における地域性の欠如や景観の乱れにつながってきていると感じます」と話す。

市では政策として公共建築物には赤瓦を使用し、外壁の色彩も一定範囲のものとしている。また、一般住宅にも赤瓦の利用を推奨し、補助制度を創設した。これらは「公共建築物の整備に関する指針」「赤瓦住宅計画指針」として2014(平成26)年度に定めた江津市景観計画で明確にした。江津の都市機能の充実と利便性の向上を図るために整備されたシビックセンターゾーン<sup>16</sup>でも、赤瓦による統一景観形成が試みられている。2021(令和3)年に完成予定の新市庁舎も赤瓦だ。

梅田氏は「江津は本町から発展して、鉄道開通後は駅前が中心となり、いまはそれがシビックセンターゾーンに移りましたが、本町も駅前も残っているから、それぞれを回遊することでまちの歴史をたどることができます。本町のまちづくり活動が20年以上、地道にでも続いていることは素晴らしく、このことは未来に向かって、江津がどう進むべきかを投げかけていると思います」と語る。梅田氏の答えはひとつ、赤瓦の景観を市民がもっと大切にするように、そして、瓦のつくり手にも誇りをもってもらうようにすることだ。

11年前から、市では赤瓦景観の啓発活動の一環として、小中学生による絵画コンクールを開いている。絵を描くことで、赤瓦の色合いや景観の美しさを実感してもらうことを狙ったもので、入選作品には子どもたちの豊かな感性や独自の見方が表れている。「絵を描いた子どもたちは将来、間違いなく屋根に石州瓦を選ぶでしょう」。山本氏と梅田氏の夢は子どもたちに託されている。



15 | 島根県芸術文化センター「グラントワ」

建築家の内藤廣の設計により、2005(平成17)年に竣工。詳細10ページ

### 梅田賀千 うめだ・のりゆき

1961年島根県江津市生まれ。神奈川大学工学部建築学科で故・西和夫教授(建築史)に学ぶ。卒業後は建築やまち並みの復原設計に携わる。江津にUターン後、建設会社に勤務。歴史的建造物を活かしたまちづくりや石州赤瓦の歴史と景観の調査研究にも独自に取り組む。現在は社会福祉関連に勤務。島根県建築士会江津支部理事、島根県ヘリテージマネージャー。

### 山本雅夫 やまもと・まさお

1961年島根県江津市生まれ。国立松江工業高等専門学校土木工学科を卒業後、大手ゼネコン勤務を経て、江津市役所に入庁。主に都市計画や建築住宅行政に従事する。現在は江津市建設政策課長(建築主事)。島根県建築士会副支部長、島根県ヘリテージマネージャー。

### 長井美暁 ながい・みあき

編集者、ライター/山形県出身。日本女子大学家政学部住居学科卒業後、『室内』編集部に所属。2006年よりフリーランス。

# 鳥根県芸術文化センター 「グラントワ」

2005年

設計 | 内藤廣建築設計事務所

## 石州瓦を壁にも使用した現代建築が 瓦の新しい表情を引き出す

「鳥根県立石見美術館」と「鳥根県立いわみ芸術劇場」が一体となった複合施設。石見地方の芸術文化拠点として、益田市に建てられた。美術館は展示室が大小4つ、劇場は1,500人収容の大ホールと400人収容の小ホールがある。他にギャラリーやスタジオなどを備え、延床面積は19,000㎡だ。

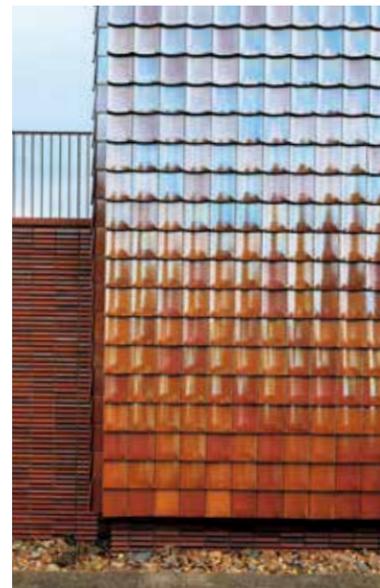
光彩を放つ石州瓦が建物を覆い、雨風から守っている。石州瓦は屋根に12万枚、壁に16万枚を使用。壁に用いた瓦は特に、ガラス質の表面が光を受けて色合いが千変万化し、惹き付けられる。素材そのままの赤褐色に見えるときもあれば、光の角度によっては金色に輝く。青空が広がれば薄いブルーに変わり、夕暮れときにはわずかに緑色になる。設計者は「石見地方の人たちが見慣れた身近な材料が、壁に使われることによって誰も見たことのないものに生まれ変わった」と記す。

回廊を巡らせた中庭が、美術館と劇場という異なる機能をまとめ上げる役割を果たす。中庭の大きさは45m四方、中央に25m四方の水盤があり、この赤褐色の建物や周囲の青空を映し出す水鏡となる。中庭で催しがあるときは、水盤は消えてなくなり広場に変身する。軒下には椅子が置かれ、地域住民が休憩したり談笑したりと、非日常空間と日常空間が交わる。



1

- 1 深い軒をもつ回廊の外側に美術館の展示室や劇場ホールが配置された構成。周囲に高い建物がないため、中庭に立つと一面、赤茶色の世界に身を置くことになる。竣工後15年の間に、中庭のタイルは張り替えたが、耐久性に優れる瓦はメンテナンスフリー
- 2 壁瓦はこの建物のために開発された
- 3 劇場・大ホールのホワイエ。公演時に開放される2階からの眺め
- 4 劇場・大ホールのホワイエでは披露宴を開く市民もいるという
- 5 劇場・大ホールの内部。折れ壁は音響を考えたもの。座席は弧を描く配置で、どこに座ってもステージが見やすい。大ホールは耐震補強や設備の入れ替えなどのため、2021（令和3）年の秋から1年半、閉鎖される



2



3



4



5

MAP 3

11

## 江津市庁舎

1962年

設計 | 早稲田大学 吉阪研究室

### 新しい時代の市庁舎のあり方を 吉阪隆正が提案

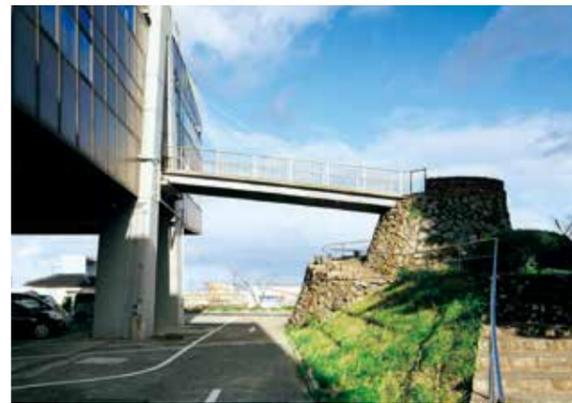
建築家の吉阪隆正(1917-1980)が設計した市庁舎。吉阪はル・コルビュジェに師事したフランス留学からの帰国後、早稲田大学構内に吉阪研究室(のちのU研究室)を設立し、当時は新進気鋭の建築家だった。江津は窯業とともに製紙業も盛んな工業都市で、吉阪は山陽パルプ江津工場(現・日本製紙 江津工場)の紹介でこの地を訪れ、市庁舎の設計を手がけることになった。

建物は傾斜地盤を利用し、台地の上に議会関係の各階を積み重ね、執行部を同一階で橋のように傾斜地の上空に張り出す。この部分はアルファベットの「A」の形の柱脚が建物を支えることから「A棟」と呼ばれる。

吉阪はA棟を空中に持ち上げ、ピロティを市民広場として活用することを考えた。1960年代初頭は地方においては依然として戦後の復興期だったが、吉阪は市民本位の新しい時代の市庁舎のあり方をここで提案したのだ。

柱のない市民広場を実現するために、当時の最新技術であるプレストレストコンクリートを採用。また、現在はカーテンウォールで隠れているが、梁は茶色で、石州瓦の地域であることを表現した。外壁や床などに石見焼きの陶板や、瓦を焼く登り窯で使う部材なども使っている。

江津市では2021年春の完成を目指して新庁舎の建設が進む。築後60年近く経過したこの庁舎は、耐震補強のうえ建設当時の姿に復元し、市民が利用できる公共施設として再生可能かどうか、検討を深める予定だ。



1



2

- 1 築山と一体の屋外階段は、通称「でんでん虫」
- 2 石州瓦を焼く登り窯で使われていた煉瓦等の部材を再利用した部分と、写真左下はB棟に設けられた階段
- 3 西側から見た外観。カーテンウォールは平成期に台風でガラスが割れたため、後付けされた。竣工後60年近くたつたいまも、プレストレストコンクリート自体は「健全」と山本氏



3

MAP 3

12

## パレットごうつ

2016年

設計 | 感性舎

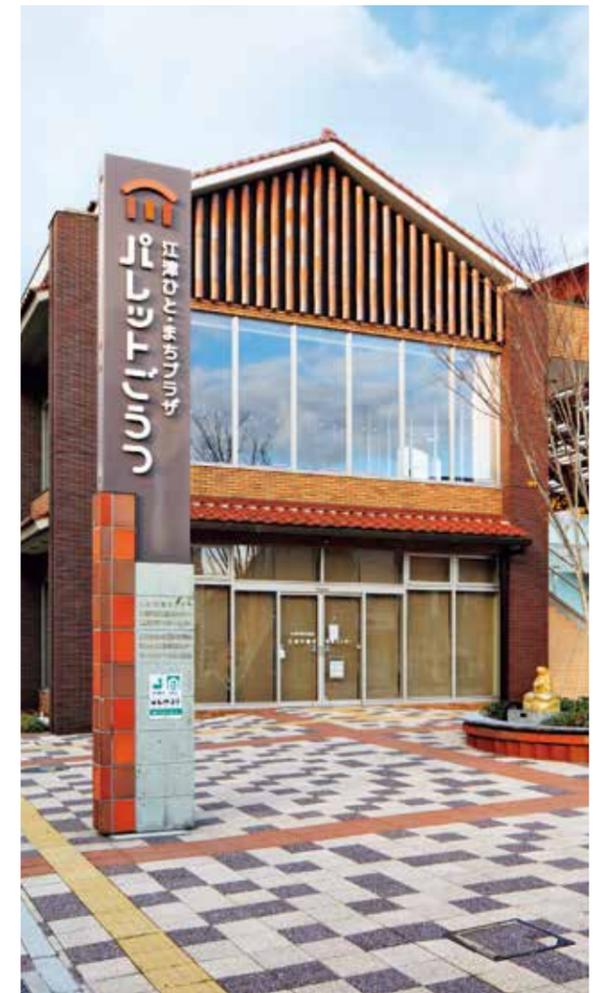
### 駅に降り立った人を 迎える赤瓦満載の建物

JR江津駅前の再開発事業の一環で整備された地上2階建ての複合公共施設。市民交流センター機能、総合福祉センター機能、子育て支援機能、観光案内機能を有する。大スパンの木アーチを架け渡した広場を囲んでコの字の平面形をもつ。設計を手がけた感性舎は広島市を拠点とする設計会社だ。

大屋根を約46,000枚の赤瓦で葺くなど、この建物には石州瓦が随所に使われている。壁面には棟丸瓦や特注の角瓦をルーバーとして採用し、瓦の新しい使い方やデザインを示している。また、内外の床タイルは釉薬特注、あるいは無釉窯変の敷瓦だ。さらに、内部のカウンター腰壁は壁瓦張り、外構化粧は瓦の小端立て。駐車場や駐輪場にも見られる。駅前ということで赤瓦を使って江津らしさを演出するとともに、市民が地元特産の赤瓦のさまざまな使い方を知る場所になることも意図している。

新製品を含む瓦はすべて江津の窯元が製造。山本氏は「屋根瓦は近年の均一なものや混ぜ葺きではなく、登り窯で焼かれた自然な色味の違いや石州瓦本来の風合いを感じられる瓦をつくってほしいと頼み、何度も試作してもらった」と話す。

江津市ではこの建物から徒歩10分弱の場所に、病院や総合福祉センター、バスターミナル、保育所、都市公園などで構成する「シビックセンターゾーン」を整備中で、ここでも赤瓦屋根など地域性のある景観形成を図っている。



1



2



3

- 1 2階壁のボーダー部に使ったのは、通常は屋根の棟の頂部を覆うのに用いられる雁振(がんぶり)瓦。「グラントワ」でも使われている
- 2 東側の広場はイベントスペース
- 3 内部のカウンター腰壁などにも瓦素材を活用
- 4 西側の外観。特注の角瓦をルーバーとして採用



4

## テーマ2

# 左官職人のふるさとで花開いた 建物の壁を彩る鰻絵のアート

取材・文 | 磯 達雄  
写真 | 小松正樹 (特記以外)

- 1 大田市大森町の西性寺にある経蔵の鰻絵。門徒であった左官職人の松浦栄吉が、1919 (大正8) 年ごろに制作したもの。松浦は中国で英国流の左官技術を学んで戻り、日本各地で洋館づくりにたずさわった [写真提供: 渡部孝幸]
- 2 大田市温泉津町にある安楽寺の本堂に描かれた龍の鰻絵。龍をモチーフにした鰻絵は多いが、幅8m、高さ3mは最大級のもの。この地で生まれた左官の山本庄吉が1889 (明治22) 年に制作した
- 3 大田市仁摩町の西往寺の本堂。中央に「双竜」、左に「金毛九尾の妖狐」、右には「安珍清姫」をモチーフにした鰻絵が飾られている
- 4 西往寺本堂の「安珍清姫」の鰻絵 (1903年制作)。作者の安田伊三郎は、隣にある双竜 (1885年制作) の鰻絵の作者である安田鹿市の弟にあたる
- 5-7 大森町並み交流センターに展示されている、解体された建物から取り外された鰻絵

左官が漆喰を材料としてつくり出すレリーフのような作品を鰻絵と呼んでいる。鰻絵といえば、静岡県こてまの松崎町で生まれた左官職人の入江長八 (伊豆の長八) による作品をまず思い浮かべる向きが多いかもしれない。しかし鰻絵は江戸時代末期から昭和30年代ごろにかけて、日本各地でつくられていたもの。特にこの石見地方には鰻絵が数多く残っている。地元で鰻絵を調査している渡部孝幸氏と、大田市の名作鰻絵を巡った。

JR大田市駅へと到着。待ち合わせていた渡部孝幸氏と合流する。ここから周辺にある鰻絵の代表作を案内してもらうのだ。渡部氏は大田市職員を経て、現在は設計事務所を主宰している。そのかたわらこの地方の鰻絵の魅力にはまり、1994 (平成6) 年から情報収集と調査を開始。そして見学会や展覧会などを通じて、その面白さを広める活動も行うようになった。

この日、渡部氏がまず連れて行ってくれたのは、大田市仁摩町の西往寺だ。海辺の小さな集落にある寺の本堂の4間の間口いっぱいに彫刻されているのは見事な双龍だ。そして左には「金毛九尾の妖狐」、右には「安珍清姫」の物語がそれぞれ鰻絵になっている。特に後者は、安珍が隠れた鐘がかなり飛び出ている迫力満点。作家の荒俣宏氏が「超3Dの大傑作」と激賞したという鰻絵は、確かに傑作だ。

続いて石見銀山の鉢山町であり重要伝統的建

造物群保存地区にもなっている大田市大森町へ。そこにある西性寺を訪れた。こちらは経蔵の4面に、鳳凰や牡丹・菊の花が仕上げられている。

これを制作したのは、1858 (安政5) 年に大田市の馬路で生まれた松浦栄吉だ。東京に出て左官をしていたが、領事館を上海で建設する仕事に携わり、そこで英国流の左官技術を習得する。そして帰国してからは、誰もまねできないその左官技術を、そのころからつくられるようになった木造洋館づくりで発揮。「左官の神様」とも呼ばれたという。西性寺で見た鰻絵は、なるほどその代表作としてふさわしい出来栄だ。

## 龍や鳳凰を緻密な造形で制作 左官のテクニックを見せつける

鰻絵とは漆喰を使って立体的につくり上げた建物装飾だ。つくられたのは、主に江戸時代末期から昭



1



2



3



4



5



6



7

和30年代ごろまで。大きさは大田市温泉津町にある安楽寺の本堂を飾る幅8m、高さ3mに及ぶ巨大なものから、民家の妻壁にちよこんと付けられた直径30cmほどのかわいらしいものまでいろいろある。描かれたモチーフには、龍や鳳凰といった伝説の動物、恵比寿や大黒天などの神様、さまざまな説話の一場面などのタイプがある。色漆喰を使って華やかな絵柄をこしらえたものや、どうやってつくったのか想像もつかない精密な造形のものなど、手の込んだ作品も少なくない。

こうした鰻絵の作品が、石見地方の建物にはたくさんある。渡部氏によると、その数は島根県内で300点を超えるという。特に石見地方の東部にあたる大田市とその周辺には集中している。道を歩いていると、ふと目をやった建物に付いていたりする。まちの景観とすっきりなじんだアート作品である。

なぜ石見に鰻絵が多いのか。渡部氏による説明はこうだ。石見といえばかつては銀山で栄えたが、明治時代になると産出量も減り、貧しい地域となっていた。人々は食い扶持を得るために出稼ぎに行くしかない。出世していく道筋が、左官職人の親方のもとで技術を磨いていくことだった。そして石州の左官集団は全国で知られるようになった。「石見出身の左官は、よそから来る職人と違って酒や博打に溺れることなく、早起きして現場に現れるので、評価が高まった」のだという。

そのなかには、有名な建築の工事を担当した左官もいる。たとえば国会議事堂や明治生命館を施工した幸田績、霞が関ビルや最高裁判所などを手

がけた前田勝義は、大田市の生まれだ。彼らは日本の近代以後の名建築を実現させてきた立役者たちである。

そんな左官の技術力をプレゼンテーションする手段が鰻絵だった。遠く離れた地域で建築の工事に参加し、そこで身に付けた左官のテクニックを、地元で思い切り披露する。故郷に錦を飾りたいという思いもあっただろう。そんな職人の心意気を結晶化させたものが、石見の鰻絵群なのである。

## 建物とともに消失する運命 解体される直前に救出することも

鰻絵は建物と一体化している。従って、建物が壊されるとき、同時に鰻絵も失われてしまう。ほとんどの場合はそうだ。前を通るたびに目を楽ませてもらった鰻絵が、ある日、気が付くと建物ごとなくなっている。そんな悔しい経験を、渡部氏は何度も味わってきた。

そこで鰻絵がある建物が解体されるという情報を聞きつけると、可能な限り駆けつけて鰻絵をていねいに外し、譲り受けるようになった。

この日の最後に訪れたのは、大田市大森町の大森町並み交流センター。その一角には、渡部氏が救出してきた鰻絵の一部が展示されている。誰が制作したかわからない作品だが、素朴な味わいがある。これに関心をもったら、銀山観光の折にでも立ち寄りとういだろう。

参考  
渡部孝幸『鰻なみはいけん：石州左官が彩る鰻絵』ワン・ライン、2008  
渡部孝幸『鰻なみはいけん：石州左官の業、鰻絵の魅力』(Kindle版) 22世紀アート、2019

磯 達雄 いそ たつお  
建築ジャーナリスト / 1963年埼玉県生まれ。1988年名古屋大学工学部建築学科卒業。1988-1999年日経アーキテクチュア編集部勤務。2002年-2020年3月フリックスタジオ共同主宰。2020年4月よりOffice Bungaを共同主宰。現在、桑沢デザイン研究所および武蔵野美術大学非常勤講師。

# 石見建築めぐり

IWAMI

- 参考
- ・島根県江津市都市政策課編「赤瓦の街並みを歩く」(第6版)、島根県江津市、2019
  - ・石州瓦工業組合ホームページ「屋根の学校」(https://www.sekisyu-kawara.jp/) 2020.12.24アクセス
  - ・江津市観光協会ホームページ (https://gotsu-kanko.jp/) 2020.12.24アクセス
  - ・江津市公式ホームページ (https://www.city.gotsu.lg.jp/) 2020.12.24アクセス
  - ・まちなみ探偵団「鏡なみはいけん」(http://www.kotenami.jp/) 2020.12.24アクセス
  - ・「天領江津本町築街道」(第8版)、本町地区歴史的建造物を活かしたまちづくり推進協議会、2020.9
  - ・文化庁 国指定文化財等データベース (https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index) 2020.12.24アクセス
  - ・渡部孝幸「鏡なみはいけん：石州左官が彩る鏡絵」ワン・ライン、2008

おことわり  
04-21ページの作品名称は文化財指定名称とし、ほかは原則として2020年12月時点の施設名称を使用しています。

日本海に面した石見のまちは、北前船の集散地として栄えてきた。中国地方最大の河川「江の川」河口に位置するのが江津で、交通の要衝であった。廻船問屋の古民家をはじめ、江戸時代から残る赤瓦の風景が見られる。

この地では耐火度の高い都野津粘土が産出され、焼物の伝統がある。しかし目が粗く、いぶし瓦には適さないため、出雲産の来待石を釉に使った釉薬瓦が特産になった。この粘土も釉薬もどちらも高温で焼けるため堅重な瓦ができる。その発色が赤瓦の色になり、独特の風景が生まれたのだ。

しかし、赤瓦のまち並みが注目されたのは90年代以降で、それほど古くはない。それまでは黒いいぶし瓦へ改修する例も増えていたが、近年再評価が進み、赤瓦の景観形成に力が入られている。江津の

他にも、黒松、浅利にも赤瓦景観が見られ、特に波子は日本海の浜に面した赤瓦の波が広がっている。寺社建築は大田をはじめとした広域に点在するが、そこで見られるのが鏡絵の傑作だ。ここではその主なものをプロットしている。

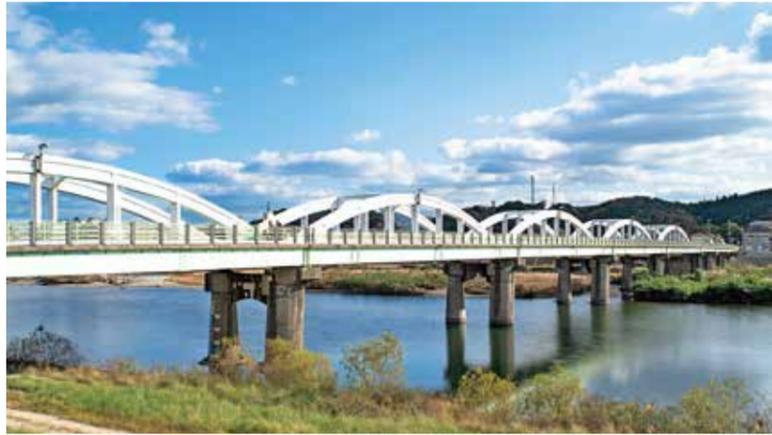
現在、赤瓦は景観の重要要素として扱われており、江津市の「パレットごうつ」、警察署、新市庁舎の屋根などに広く採用。益田市の島根県芸術文化センター「グラントワ」は、赤瓦の可能性を拡げた公共建築として話題を呼んだ。近現代建築も多く、吉阪隆正の「江津市庁舎」や大田市仁摩町出身の高松伸の作品も随所に見られる。石見の建築旅は、海岸をゆく山陰道を巡る旅。

写真 | 小松正樹 (特記以外)



01 たかつの 高角橋

設計 | 不詳 竣工 | 1942年 益田市須子町～高津町  
過酷な自然環境を受け、石見地方のインフラには各時代の技術が注ぎ込まれている。清流・高津川に架かるこの橋もそのひとつ。1892年に初代の木造橋が架けられたが、5度の洪水で流失を経験。現在の橋は、第2次世界大戦中に架けられた。その後、橋全体を持ち上げる大工事、川幅の拡張、桁橋の継ぎ足しを行いいまに至る。風景に溶け込む白い5連アーチは全国的にも大規模で、鳥根県では唯一の鉄筋コンクリート・ローゼ桁橋。彫りの深いアーチのディテールも美しい。土木学会選奨土木遺産



02 ▶p.09, p.10-11参照

鳥根県芸術文化センター  
「グラントウ」  
設計 | 内藤廣建築設計事務所  
竣工 | 2005年  
益田市有明町5-15

04

浜田市世界子ども美術館  
設計 | 高松伸建築設計事務所 竣工 | 1996年 浜田市野原町859-1  
海を望む公園の一角に立つ、「日本海に漂う創造と美の船」をコンセプトに設計された美術館。日本海を一望できる3階の多目的ホールは、船底を思わせる曲線を描いた天井をもち、市民の創作活動の場として演奏会から作品展示まで幅広く利用されている。細長い矩形の建物の足元には、スロープを伴った円形広場が広がり、隣接する大学キャンパスとの間のシンメトリーを強調したランドスケープデザインも見どころのひとつ



05

鳥根県立しまね海洋館アクセス  
設計 | 都市基盤整備公団+日建設計(本館、ペンギン館、別館シロイルカ繁殖プール)、リブアートプランニング(屋外通路)  
竣工 | 1999年(本館)、2008年(ペンギン館)、2011年(別館シロイルカ繁殖プール)、2017年(屋外通路)  
浜田市久代町1117-2  
浜田市と江津市にまたがる鳥根県立石見海浜公園の一角に立つ、中国・四国地方最大級の水族館。サメをイメージした本館には、屋根に石州赤瓦、壁面に同県を代表する石材である福光石(ふくみつし)がふんだんに使われている。本館と広場を結ぶ、長い屋外通路の屋根にも石州赤瓦を採用。緩やかな曲線を見事に仕上げています。また、この一帯のランドマークとなっている横断歩道橋「はっしータワー」は、全国的に見ても例が少ない片側からのみケーブルを張る「片持ち式」の斜張橋で、こちらも必見だ



03

益田市立歴史民俗資料館  
設計 | 不詳 竣工 | 1921年 益田市本町6-8  
益田川沿いに立つ、石州瓦の屋根が目引く建物。美濃郡役所として建てられ、益田警察署、県の益田総合事務所などとして使われたのち、1983年に資料館として開館したが、その3カ月後に県西部を襲った豪雨水害で被災。建物内は1.2m浸水したという。道を挟んだ向かいには、当時の水害の記録を刻んだ防災記念碑が立つ。入母屋造りの正面玄関など、大正期の役場建築の特徴をよく残すが、老朽化のため現在は休館中。2021年より2年かけて屋根の葺き替えなどを含めた大規模修復工事を行う予定。登録有形文化財



06

旧跡市小学校  
設計 | 河野工業所(請負人:河野勇一郎、工事監督:河野通孝) 竣工 | 1938年 江津市跡市町632  
江津市中心から車を走らせること約10分。赤瓦を載せたアル・デコ様式風の本造校舎が見えてくる。正面玄関の切妻破風、校舎の外側に設けた階段室といった建築的特徴に加え、木製のダストシュートが現存する希少な建物だ。校舎は、保健衛生と堅牢さに重点が置かれたといひ、教室天井まわりに斜材を設けた強固な構造が採用されている。講堂の左右対称の格子天井、ステージのアーチに施された鍍絵や天井まわりの漆喰装飾も美しい。2017年に廃校となったあとも近隣住民の創作活動の場として活用されている



07

佐々木準三郎記念館(旧都野津町役場)  
設計 | 河野通孝 竣工 | 1937年 江津市都野津町2088  
かの地で漁業、瓦製造業などで財をなした佐々木準三郎の寄付を得て建設された元町役場。木造2階建ての建物には、旧花田医院(08ページ参照)と同様にカーキ色の石州瓦が載っていたが、老朽化により現在の赤瓦に葺き替えられた。そのほか2度の大規模改修を行った記録があるが、町長室や2階の元議場の天井、外壁のクラッチタイルは、当時のままの姿を残す。近年発見された棟札によると、旧跡市小学校と同じく河野通孝が設計にかかわっており、2階の格子天井と換気口のディテールにそれが見てとれる。登録有形文化財



08

小川家雪舟庭園  
作庭 | 雪舟等場  
完成 | 室町中期  
江津市和木町165



作庭家・重森三玲が「日本庭園史上特筆大書すべき」と讃えた書院庭園がある。画聖・雪舟が逗留した際に作庭したと伝えられ、上段が枯山水、下段が池泉の上下二段からなる池泉鑑賞式庭園だ。山の斜面と名石の巧みな組合せによって、水墨画のような景色が広がる。小川家の先祖が承久の乱のち京から現在の地に居を移してから約800年。庭ができてから約500年。その間、私費を投じてこの庭を守ってきた。「春夏秋冬、変化はあまりない庭です。ですがいつ見ても飽きがかないんです」(42代当主夫人)。書院は老朽化により建て替えられたが、東石や欄間、床柱などはもとの部材を生かしている。鳥根県指定文化財



09

江津市新庁舎  
設計 | 佐藤総合計画 竣工 | 2021年予定 江津市江津町1016-4

▶p.09参照

10

江津市総合市民センター(ミルキーウェイホール)  
設計 | 高松伸建築設計事務所 竣工 | 1995年 江津市江津町1110-17  
江津駅北側の紡績工場跡地につくられた、大ホールの他に会議室を備えた市民ホール。ロの字型のフレームが目引く建物は、市内を流れる「江の川」と、夜空に輝く「天の川」の流れから、「ミルキーウェイ」の愛称がつけられた。夜になると、光ファイバーによって冬の星座や夏の星座をライトアップで表現(現在は中止)。外壁にまとった淡い水色のタイルが、陽の光の変化によって、刻々と表情を変える



11

江津市庁舎  
設計 | 早稲田大学 吉阪研究室  
竣工 | 1962年 江津市江津町1525

▶p.08, 12参照

13

旧江津町役場(旧江津市庁舎本庁)  
設計 | 不詳 改修設計 | 尾川建築設計事務所  
竣工 | 1926年 改修 | 2007年、2008年 江津市江津町121-1  
652年創建の山辺神社の参道沿いに立つ、江津町役場として建てられた鉄筋コンクリート造および木造2階建ての庁舎建築。改修工事を経て、まちづくりの拠点施設「江津本町廻街道交流館」として活用されている。外装に施されたアル・デコ調の細工や上げ下げ式の窓が当時のまま残る。中に入れば、異なる構造を体験できる。また外観からは想像できないが、寄棟造りのユニークな建築だ。建物が立つ江津本町は、かつて海運と舟運で栄えた町。山辺神社の境内には、廻船問屋名や船名が刻まれた石灯笼などが寄進されており、海運と舟運にかかわる人々から篤く信仰された歴史が窺える。登録有形文化財【写真:石田篤】

12

パレットごうつ  
設計 | 感性舎 竣工 | 2016年 江津市江津町1518-1

▶p.13参照

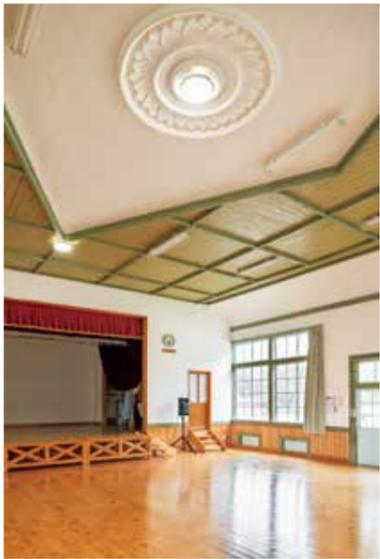


14 ▶p.08参照  
藤田家住宅（五島屋）  
設計 | 棟梁 運平・浅吉・政右衛門（板図より） 竣工 | 1853年 江津市江津町328

16  
旧江津郵便局  
設計 | 不詳 改修設計 | 尾川建築設計事務所  
竣工 | 1885年ごろ 改修 | 2008年  
江津市江津町337  
郵便制度が始まって間もない明治前期に建築され、いまもその姿を残す擬洋風建築。当時の郵便局長が地元の材木商に建築を依頼し、神戸の教会を模倣して造ったとされる。局舎として使用後、内部は個人住宅として改造され、その後、空き家となっていたが、復元工事により当時の姿を再現。鮮やかな青色ペンキ塗りの柱や窓枠、さらに漆喰でコーナーストーンを模すなど、建築当初の姿を取り戻した貴重な局舎建築。現在は、まちづくり推進協議会が管理・運営している。登録有形文化財 [写真: 石田 寛]



18  
波積ふれあいホール  
（旧波積小学校講堂）  
設計 | 不詳  
改修設計 | 尾川建築設計事務所  
竣工 | 1934年 改修 | 2008年  
江津市波積町本郷325  
地区を挙げての大事業として校舎とともに建てられた小学校の講堂。1980年に閉校後、校舎は解体。講堂は保存され改修工事を経て、地域のコミュニティ施設として活用されている。同施設を管理する波積地区まちづくり協議会の松原あゆみさんは、「小学生のころパーボールをするには天井が低くて、でも、天井の鏝絵も含めてほぼ当時のままです」と語る。同地区の歴史を記した『波積のさと』（波積のさと刊行委員会、1980）によれば、講堂は儀式集会用に建設され、正面祭壇（ステージ）は戦後改造したとある。つまり天井の鏝絵は祭壇装飾として制作されたと推察される。戦中戦後、そしていまも地域住民に愛される建築だ。2010年しあま観賞受賞



20 ▶p.14-15参照  
安楽寺  
鏝絵制作 | 山本庄吉 制作年 | 1889年 大田市温泉津町小浜11105

21  
馬路満行寺  
鏝絵制作 | 松浦満幸 制作年 | 1997年  
大田市仁摩町馬路487-1  
日本海を望む高台に立つ満行寺には、現代の左官職人が制作した鏝絵がある。1997年に行った本堂の屋根葺き替えにあわせて、地元の左官職人・松浦満幸が制作したものだ。松浦氏は、本業の傍ら馬路出身左官の優れた業績を蘇らせようと仲間とともに鏝絵制作に取り組み、この鏝絵が初の大作となった。鏝絵は、屋根葺き替え後に、その足場を使って直接妻壁に制作。仕事を終えた夕方や週末を使い、約3カ月で完成した。鮮やかな鏝絵に、現代に受け継がれた左官の技が込められている



15 ▶p.08参照  
横田家住宅（沖田屋）  
設計 | 不詳 竣工 | 江戸後期 江津市江津町

17 ▶p.08参照  
花田医院診療所及び主屋（旧花田医院）  
設計 | 大工棟梁 森田勘十郎（聞き取り） 竣工 | 1937年  
江津市江津町147他



19  
敬願寺  
鏝絵制作 | 横坂治義  
制作年 | 昭和初期  
大田市温泉津町吉浦393



山陰本線沿いの前面道路からはその存在をうかがい知れないが、線路を越えて境内に入り、本堂側から振り返ると経蔵上部に施された龍の鏝絵が目に入る。同地生まれの左官職人・横坂治義（1903-1977）が制作した鏝絵で、横坂は彫刻を得意としていた師匠の指導により彫刻を始め、遠慮を過ぎた1964年に帰郷。横坂の自宅天井にも自身で彫刻した鏝絵があるという。経蔵を守るように施された立体的な龍、吐き出す赤い炎、そして掴んだ青い玉も見事だ

22  
ふれあい交流館  
設計 | 高松伸建築設計事務所  
竣工 | 1993年  
大田市仁摩町天河内975  
仁摩サンドミュージアムの付属施設として建築された、ガラス工芸品の展示および体験工房。敷地の高低差を利用し、斜面に埋め込むように建築されており、施設屋上には水盤が広がる。この水盤に掛け渡されたブリッジから施設内へと入る仕掛けで、ブリッジは「永遠の橋」（テラのハン）と呼ばれている（現在は建物側面の出入口を利用）



23  
仁摩サンドミュージアム  
設計 | 高松伸建築設計事務所 竣工 | 1990年  
大田市仁摩町天河内975  
仁摩町には「鳴り砂の浜」として知られる琴ヶ浜がある。それにちなんで建設された砂の博物館だ。総ガラス張りのピラミッドは大小あわせて6基あり、見る角度、天候によって刻々と表情を変える。ピラミッドがモチーフとなったのは当時の町長の発案だという。最も大きなピラミッドの中には、高さ5.2m、直径1m、砂の量1トンの1年砂時計が設置されている。「大小のピラミッドが呼応する景観の圧倒的な存在感」（高松伸）は、施設周辺の国道からも感じとれる



27  
安養寺  
鏝絵制作 | 不詳 制作年 | 明治期 大田市大森町ホ226  
往時の銀鉱石採掘のメッカ「仙ノ山」の頂とその周辺には100余りの寺が所在していた。安養寺は、いまから250年ほど前に、その1カ所として現在地に下山した寺院である。その際、まず経蔵がつくられ、龍の鏝絵もその際に奉納された。現在の経蔵は、2008年に全解体・修復を経て蘇った。「子どものころから見てきた龍です。作者はわからずとも、後世に残さねばと思ったのです」と住職。その想いを受け、腕利きの大工や左官職人たちが慎重に取り外したうえで通りに取り付け、経蔵下部のなまこ壁も復元。新たな命が吹き込まれた



29  
蓮教寺  
鏝絵制作 | 森山孫一 制作年 | 1903年ごろ  
大田市長久町長久17-6  
慶長年間に創建した石見銀山百カ寺のひとつ。1991年に移築する際、本堂の鏝絵を壁ごと剥がして、以前と同じ本堂正面入り口上部に取り付けた。移築の際、欠損箇所は左官職人が補修後、塗装職人がペンキで仕上げた。同地出身の左官職人・森山孫一が30歳ごろに制作したもので、孫一は、出稼ぎで生計を立て、おもに東出雲あたりで土蔵を手がけていたという。東柱を挟んで、中央と右に「龍」、左に「竹林に虎」が彫刻され、深い軒下にモトーンの世界が広がる



24 ▶p.14-15参照  
西住寺  
鏝絵制作 | 安田鹿子・児島嘉六（双龍）、安田伊三郎（安珍清姫、金毛九尾の妖狐）  
制作年 | 1885年（双龍）、1903年（安珍清姫、金毛九尾の妖狐）  
大田市仁摩町仁万上本町1528

25 ▶p.14-15参照  
西性寺  
鏝絵制作 | 松浦栄吉 制作年 | 1919年ごろ  
大田市大森町11510

26 ▶p.14-15参照  
大森町並み交流センター（旧大森区裁判所）  
設計 | 不詳 竣工 | 1890年 大田市大森町4490  
大森区裁判所として開所した建物。1890年に制定された法令により、地方裁判所の下に置かれた下級裁判所で、現在の簡易裁判所に近い役割を果たしていた。鳥根県内には8カ所置かれていたが、建物が現存するのはこのみだ。外観のプロポーションを妙に感じるのには、木造平屋建てでありながら法廷部分の天井を高くしたのにあわせて屋根を持ち上げているため。昭和20年代まで機能を果たしていたが、復元・整備のうえ、現在は、石見銀山関連の資料展示および文化交流施設として利用。一角には鏝絵も展示されている



28  
大願寺  
鏝絵制作 | 不詳  
制作年 | 明治期  
大田市大田町宮島口898  
2階建て入母屋造りの鐘楼門の妻壁に施された鏝絵。鐘楼門自体は、1762年の建立だが、鏝絵はその後に奉納されたものと推測される。かつては両妻壁に「龍」と「虎」があり対をなしていたが、1989年に屋根を葺き替える際に、傷んでいた「虎」は破損。現在は、「龍」のみが残る。妻側に回り込み門を見上げれば、天からこちらを睨み据える龍と出会う

